山の回顧録～炭焼きから薪売り、そして材木屋として

谷口　忠義・中村　一幸

The Reminiscence of the Era for Liquid Evolution in Japan

Tadayoshi Taniguchi, Kazuyuki Nakamura

１．はじめに

本稿は、炭焼きから薪炭商・材木商へ転身された中村一幸氏の戦後の炭や薪に関する回顧録、随筆である。

薪炭は1960年代以前においては重要な燃料源の一つであった。2010年の最新の木炭生産量は13,747.8トン、薪の生産量は85,481層積立法メートルである。[1]統計が残されているなかで、生産量のピークは木炭、薪ともに戦時経済体制下の1940年であり、木炭では控えめな農林省統計表の数値で2,699,000トンである。[2]薪では山林局の数値が控えめであり、薪の層積から実積への換算を７掛けとして計算すると、151,821,000層積立法メートルであった。[3]

1990年代以降、木炭はひそかなブームをまきおこし、東京銀座に備長炭専門店が1999年に出店するなど、燃料以外の用途にも利用は拡大している。また、霞ヶ浦の波消し用としての粗朶が利用されるなど、単に燃料として利用する以外の多様な用途の開発と利用が今日進んでいる。こうした、木炭、薪、粗朶といった木質系バイオマスの再評価がなされてきているとはいえ、最盛期に比べれば極端に少なく、2010年の生産された木炭は往時の0.5％、薪は実に0.06％に過ぎない。これは1950年代後半から1960年代にかけての流体革命、エネルギー革命の凄まじさを物語っている。

生産者数もそれに応じて減少している。生産量が史上最高に向かってその後増えていく時期である1930年に、国勢調査の職業小分類の炭焼夫は85,534人であった。この数値は本業のみであるから、農家の副業などを含めると人数はもっと増える。1923年の従事戸数は、木炭生産を本業とするのは40,603戸、副業生産は181,066戸、合わせて220,669戸となる。１戸あたり1.5人と見積れば、本業・副業をあわせると33万人以上となる。それが、エネルギー革命を経た現在2010年にはわずかに3,540人と、大正末の１％に減少している。

ところで、気候変動（地球温暖化）問題、生物多様性、地域の資源循環などの理由から里山が見直されてきており、里山利用の一つとして薪炭生産も評価されている。また、森林資源管理、その持続的な利用として日本の里山利用は世界的に高く評価され、2009年度のノーベル経済学賞を受賞したオストロム教授の共有資源管理における自主統治の可能性を実証する事例データとしても、日本の里山は大いに

貢献している。

実際に里山や薪炭生産に関わり、しかも、その利用の最盛期を過ごしてこられた方々の回顧録、随筆を世間に公表することは、近年の木質系バイオマスや里山の再評価という社会的な動きを考えると、その意義は十分に大きいと考える。

しかし、そうした薪炭全盛時代の関係者はその多くが亡くなられており、生存者も極めてご高齢であるのが現状であり、今回の中村氏の回顧録は非常に貴重なものであると思われる。炭焼き自身による著書は、管見の限り３冊である。宮城県の山間地で炭焼きをされてきた佐藤石太郎氏による『沈んだ村の物語』、富山県朝日町蛭谷（ビルダン）出身で、地元や隣接地域、栃木県足尾、長野県と炭焼きをされたほか、蛭谷和紙も再興された米丘寅吉氏による『二人の炭焼、二人の紙漉』であり、あと一冊は本稿の共同著者である中村一幸氏による大著『奥三河、南信州に生きた越前炭焼とその息子』である。この３人のうち、極めて残念なことであるが、宮城県白石市の佐藤氏は昨年2011年10月に亡くなられ、富山県朝日町の米丘寅吉氏も2009年３月に亡くなられている。

ちなみに、炭焼きを雇う立場である薪炭商であり、エネルギー革命前に執筆された異色の書籍に中村善八氏の『岩手の木炭誌』がある。炭焼きの方ご自身の著作ではなく、聞き取りの形での書籍としては「三州足助　炭焼物語」がある。また、2002（平成14）年から林野庁と文部科学省による「森の“聞き書き甲子園”－FOXFIRE IN JAPAN－」が開催され、森の名手・名人に高校生が取材しその結果をまとめている。[4]その他にも、各県史において炭焼きの方からの聞き取りによる記述がある。

２．資料

本稿の多くは、中村一幸氏から谷口宛に出された2011年７月４日付の書簡と2012年１月25日付の書簡に基づいている。前者は原稿用紙19枚、後者は原稿用紙２枚の分量である。

中村一幸氏は、1917（大正６）年生まれで、ほぼ１世紀近くを生きてこられた。90代半ばというご高齢にも関わらず、筆圧や文章はしっかりと書かれており、文意も極めて明瞭である。

2011年７月４日付の書簡の冒頭に、「戦後の炭や薪に関したことで私の知っていることを記します。」とあり、中村氏が戦地から帰還された1946（昭和21）年から話が始まり、炭焼きをされていた長野県天龍村神原地域での過去や現在の出来事や状況、1952（昭和27）年に京都府宇治市西笠取の山間の村へ移られた後のこと、さらに1953（昭和28）年に京都の市街地に移住され、薪やパルプ材、建築用材などを伐り出して販売する材木屋として独立された後から現在までの状況が書かれている。その他に、これまで中村氏が先達から教わり、ご自身で体験され修得された木や山に関する知識も披歴されている。なお、戦前のことや炭焼きに関わる日常生活などは、中村氏の大著、『奥三河、南信州に生きた越前炭焼とその息子』には非常に詳しく書かれており、本稿と合わせて読まれるとより全体像がはっきりするであろう。

本稿では中村氏による書簡のスタイルをできるだけ維持した。そのため、「私」とは中村氏を指しており、不明瞭な場合は谷口が補足している。明らかな書き違えや脱字などは修正し、谷口が補足した箇所は大カッコで示した。原文にも小見出しが記載されているが、適宜、追加と補足を谷口がおこなった。さらに、時候の挨拶や結語など、内容と関わりのない箇所は割愛した。

３．回顧録

（１）中村一幸氏の戦後の歩み

その［本論］前に戦後私の歩んだ道程をかいつまんで書いておきます。

私［中村氏］が戦争から帰って来たのは昭和21年１月で、そのとき我が家は長野県下伊那郡神原村（現在天龍村大字神原）の、天龍川に近い高い山に住んでおりました。

食糧難のため我が家と私の儀兄谷口［著者の谷口とは別人］と仲間で近くの勝負ヶ平という山を借りて移り、半［分］づつに分け合いその外の山も借り稗、粟、とうもろこし、大豆、小豆などを作る焼畑農業を始め、その傍で椎茸栽培を手がけ、冬のうちだけ雪の降らない天龍川に面した愛知県豊根村の山へ炭焼に行きました。其所は佐久間ダム堰提辺り西側の岩崖山でした。

昭和27年７月、食糧事情が好転し始めたことから他所の土地に移り住むつもりで私は、春秋茸栽培仕事の手伝に帰って来ることにして父母らを勝負ヶ平に残し、京都府宇治市の山間の村へ移りました。

此所は薪の産地で私も一年間ほど薪伐り仕事をし、昭和28年７月京都市中へ移り、ある材木会社の山人夫として働くようになりました。

昭和31年、現在住んで居る家に移り、会社の仕事を止め自立して山の立ち木の広葉樹を買い、薪の伐り出し売り、次いで製紙用パルプ材、更に建築用材の杉檜松の木などの伐り出し売る材木屋に転じ、細ぼそと69歳まで続け、年を取ったのと材木値下がりとで仕事を止めました。

父母は、昭和35年京都へ来て私と同居しました。

勝負ヶ平の山は私が買い取り、父と儀兄谷口とが杉檜を植えてくれた二町歩前後の小さな山ですが、下苅、枝打ち、間伐に毎年行き、また子供と一緒に夏北アルプス南アルプス登山を七年間続け、仕事を止めてから電車、息子の車、自分運転の車などで北は北海道、南は鹿児島県まで各所を走り回りました。

それはさておき、戦後の炭や薪に関したことを地域別に記します。

（２）佐久間ダム西側の山

戦中、炭不足から名古屋、豊橋など東海道筋の企業が政府の許可を受け、愛知林産という会社を設立して炭焼を入れて炭を焼かせ、焼いた炭は鉄索または木馬で天竜川の川端へ下ろし、川舟で中部（ナカッベ［ナカベ］）へ下げて陸上げし、一部を政府に供出し、大部はトラックでそれぞれの会社へ分けて送っていたのですが、昭和28年佐久間ダムの工事が始まり、舟が使えず危険立退きとなって炭を焼くことは終りになりました。

その上流の愛知県富山村（現在豊根村富山）、そのまた上流の長野県神原村坂部の山にそれぞれ炭を焼く者が二、三軒居たようですが炭送りに舟を利用出来なくなり炭焼を廃業したようでした。

（３）神原の勝負ヶ平付近と向方

昭和21年１月に私が戦地から帰って来たとき、勝負ヶ平付近に我が家を含め炭焼四軒少し離れた山に一軒向方付近の山に二軒居りました。

勝負ヶ平付近に居た炭焼四軒は食糧難から焼畑農業に入り、冬のうちだけ我が家と谷口は昭和26年の冬まで佐久間ダム西側の山へ炭焼に行き、昭和27年私が京都の方へ移ったため、父は近くの山で炭を焼き上物は売ったが下物は椎茸乾燥用の自家用炭を昭和34年まで続けました。

谷口は昭和32年まで冬のうちだけ近くの山で炭を焼いたが、その後向方へ移り別の仕事をするようになりました。

他の二軒のうち一軒は昭和32年頃まで冬のうち炭を焼き、他所の地へ移って行きました。

もう一軒は冬のうち何所かへ働きに行き、昭和24年他所の地へ移って行きました。

少し離れた山に居た一軒と向方付近の山に居た二軒も食糧難から炭を焼いたり焼かなかったりしていて、昭和23年、４年頃何所かへ移って行きました。

山間村［は］何所も同じだったようですが向方の農家の人達は、戦中政府から炭を焼け炭を焼けと貴［ママ］付かれ、農業の傍らに家から通って炭を焼く者が増えたというが、戦後食糧不足から食い物作りが先になり炭を焼く者が減り、炭の需［要］減退とともに昭和20年代半ばの頃は炭を焼いている者が十軒余りありましたが、昭和30年代に入って五軒ぐらいに減り、昭和40年代に入った頃には椎茸乾燥用や炬達炭の自家炭を焼く者が二、三軒あるという程度になったようであります。

（４）和合（現在阿南町和合）

戦争中、売木［うるぎ、長野県下伊那郡売木村］や神原その外の地からも炭焼が集中して入り、政府に半ば強制され農家の七割ぐらいが炭を焼くようになり、長野県下有数の炭の生産地になったといいます。

終戦後食糧難から闇でもなんでも食べ物が得られそうな所へ移って行った者が多く専業炭焼は十軒程度に減ったといいます。

その炭焼も山越しに遠い所から闇で食べ物を買って来て炭を焼くようになり、焼く炭の量はぐんと減ったようであります。

政府が炭を買い上げて都市の消費者に配給する統制は、昭和25年撤廃され炭は自由販売となりました。

炭を焼く量が減っているのに統制を撤廃したのは、都市生活者に練炭やコークスを使う者が次第に増えたのかも知れません。

諸物価と労働賃金は鰻登りに上昇するのに炭の値はあまり上がらなかったと思えること、広葉樹の箱製造用や製紙用チップ材の需用が増え盛んに伐採されるようになり、炭焼がその仕事に出るようになったり他所へ移って行く者もありまして、昭和30年代に入って少し過ぎた頃には炭焼は二、三軒に減ってしまったようでした。

農家も百姓の方に力を入れ炭を焼く者が減り、焼いている者も焼く量が次第に減り、昭和40年代に入った頃には売る炭を焼く者が居なくなり、自家用に誰かが偶に炭を焼くという程度になったようでした。

(5) 京都での状況

京都近辺では薪を割木と言い、昭和27年７月私が長野県から移って来た、京都府宇治市西笠取という山間の村一帯は、明治時代から割木（薪）の産地で太い松の木は建築用材に伐り出たれておりましたが、細い松や広葉樹は割木（薪）に伐って出荷されており、私もその仕事に携わりました。

私が京都の市街地へ移ったのはそれから一年後の昭和28年７月でした。その当時京都市民の家庭燃料は薪と炭と煉炭豆炭でした。

京都には清水焼という陶磁器業者と、友禅染業が多く居て、陶磁器業者の窯には松の割木（薪）を焚き、友禅染業者は主として広葉樹の薪を焚いており、街中の燃料店の倉庫には割木（薪）を山ほど積んであり、その脇に炭を積み煉炭豆炭を積んでありました。

薪は京都市近辺の山で伐ったものを運び込まれたようですが、炭は京都市から遠い同市北方丹波地方、滋賀県安曇川上流の現在の市町村名で言うと、大津市葛川、その下流の高島市朽木、その外の山や福井県若狭の山で焼いた炭がトラックで運び込まれていたようでした。

（６）京都賀茂川源流の雲ヶ畑の薪炭事情

余談になりますが賀茂川上流の雲ヶ畑といい所の、炭薪事情を書き添えておきます。

雲ヶ畑の中央の小・中学校の在る所まで京都市街地の北大路橋から11キロ、上賀茂の町外れから約10キロメートルぐらいですが、明治の初め頃まで川筋に人の歩く道がなく、雲ヶ畑の一番下の一ノ頼［市ノ瀬］から西へ差して入っている谷筋道を遡登り、氷見峠を越えて上賀茂の町外より少し川上へ下り、京都の街へ入るようになっていたそうです。

雲ヶ畑は、江戸時代からかも知れないが明治初年の頃か村人が炭を焼き、商人らが担いだ天秤棒より少し太い棒の両端に炭を括り付け、担いで氷見峠越えの道を通って京都の街へ運んだそうです。

また余談になりますが、京都や滋賀の大津辺りでは牛のことをベタ、牛車のことを手車といい、牛が車を引いて通る道をベタ道と言いました。[5]

そのベタ道（手車道）が川傳［つた］いに上賀茂から雲ヶ畑へ何時頃開通したか聞いてはいま［せ］んが、ベタ道が開通してから炭をベタで京都へ運び、自動車が通るようになってから炭や薪や丸太を自動車で運び出すようになったと言います。

私が雲ヶ畑へ山仕事に行ったのは昭和28年からですが、それから三、四年後の昭和31、32年頃山を歩いて見ると炭を焼いた窯跡が至る所にあり、窯跡は肥えて杉の木がよく育つというので昔の人が何本か植えたという樹齢百年近くの杉の木が所々に生えており、更に村場近くの山で炭を焼いた後地に植えた杉檜が樹齢七、八十年、五、六十年の伐期に達した杉檜木が沢山あり、その山の杉檜は主として地元の人達が伐り出し、薪は他所から出稼ぎに来た人達が主として伐っておりました。

（7）京都市民の木炭、薪使用の移り変り

陶磁器業者は今も松の割木（薪）を焚いているようだが、友禅染業者は昭和40年半ば頃からおいおい石油を使うようになったようです。

一般市民はどうか、私の家の例を基にして述べます。

昭和28年私が京都市中に移ったとき、家は材木会社の工場内に建てられた家で、共同炊事場と共同浴場があり其所で焚く薪は、丸太の切り端しでした。

家の中では燃料店で買って来た炭を七輪に火を起こして使い、炬達なしで冬寝るときは蒲団に中へ湯たんぽを入れました。

昭和31年現在住んでいる家へ移ってからは、カマドがないため石油の空缶をカマド代りに使い、飯炊［ママ］と風呂沸しに薪を使いましたが、お数を煮たり茶の湯を沸かすのは七輪で炭を使いました。

薪は買ったものではなく、当初は材木会社から貰って来た丸太の切り端を使い、私が自立して薪の生産業に入ってからは売り物にはならない切り端を運んで来て使いました。

堀炬燵があり炬燵と七輪には炭を使いました。

昭和36年頃ガスコンロを買い、その翌年頃から飯もガスで炊くようになり、風呂も傷んで沸かさなくなりましたから、薪使用はこの頃で終りとなりました。

家が大きくカマドや風呂が整備されている家では、昭和40年をかなり過ぎた頃まで薪を使っていたようでした。

昭和40年代に入ると燃料店に置かれている炭は少なくなり、扱う量が少なくなった所為か値が割高となっておりました。

昭和42年頃の夏、滋賀県大津市葛川木戸口という山間の村にまだ炭を焼いている人が二軒あると聞き、炭を焼いている人から直接買えば値が安いだろというで、行って見ると百姓の［作業、仕事の］間に炭を焼いている家が二軒ありました。

そのうちの一軒の炭を焼いている窯まで行き、秋までに15キロ俵10俵トラックの丸太を積んだ上に積んで送ってもらうよう代金を払って頼みました。

そのとき炭を焼いていた人が、もう炭を使う人が少なくなって、京都の燃料店は割安にしか買ってくれないから、窯があり炭に焼く木が少し残っているから炭を焼いているが、木が無くなったら炭焼を止めるつもりだと言っておりました。

ついでに、この頃薪や炭を売る店が自動車に油を売る、ガソリンスタントに切り替えた店もありました。

それはさておき、炭は10月半ば頃トラックが積んで来てくれ使いましたが、三年ほど後電気炬燵と石油ストーブを買い、炭を使わなくなって二俵残り、長く仕舞って置いたら俵が腐り、ボール箱に詰め替え今も残っております。

電気炬燵は近所の家では、我が家より二、三年前から使始めたようでした。

（8）現今の炭と薪事情

都市の一般家庭では炭も薪も殆ど使わないようですが、都市では魚屋が魚を焼くのに炭を使い、風呂屋が風呂沸かしに、山間地の一般家庭では風呂沸かしや長時間かけて物を煮たり茹でたりするとき、薪を使う家もあります。

信州南部山間村では五平餅（五幣餅）焼きに炭を使っております。［詳しくは後述］

（9）炭のこと

炭は使う者があるから焼く者がいるということです。

テレビに時どき出ますが、鰻の蒲焼きに適する備長炭という樫の木の多い和歌山県で焼いているとのことです。

この炭は黄金色の火炎が燃え立つとても熱い窯から火のまま掻き出し、灰や炭の粉交りの土を被せて火を消すもので、叩けばちんちんと金属音がし、折ると折り小口が黒光しいて堅く炭の中では最高級で、火持がよく火力が強いため鰻の蒲焼きなどに使われているようです。

また何所かでは人家の近くに炭焼き窯を造り、遠近の山で伐った木をトラックで運んで来て炭を焼き、窯から火のまま掻き出すのと火を消してから出すのとがあるようで、いずれも時々テレビで放送しています。

(10) 炭生産地の所感

1）京都近辺

七、八年前から自分運転の自動車で出歩かなくなりましたから今も炭を焼いているかどうかは確とは分りませんが、京都市街地から乗合バスで一時余りかかる京都市左京区広河原では、バスの終点近くに木炭ありますと立札を立て、山で伐った木を軽トラックで運んで来て炭を焼いている人がおりました。

此所は最近もテレビで映しますので今も炭を焼いているようです。

滋賀県高島市朽木の人家のある針畑川沿いに炭ありますと立札を立て炭を焼いている人がおりました。

2）福井県

私の父母の故郷福井県勝山市北谷町谷の東山という地区の山で、私の従兄弟の中村一作が隠居仕事にと長い間炭を焼いておりました

［しかし］七、八年［前］病で倒れ終りとなりました。

同県九頭竜ダムの水の溜った上果（上流の終わり）の国道沿いに以前から炭を焼いている人が居りました。

今年［2011］春の連休の時、息子運転の車で通りましたが、今は焼いていないようでした。

次は山間地で今も炭を使っている所があります。

3）長野県

長野県天龍村神原の向方という集落の人が七、八年前、炭を焼けば少こしは金が取れるのだが植林し

過ぎて炭に焼く木が無くて、と言っていた人がいたそうです。

（11）現在の炭利用：五平餅についての所感

次は今も炭を使っている所のことを申し上げます。

向方の北約４キロメートルの国道151号線の通る、阿南町新野の道の駅では、炭火で焼いた五平餅（五幣餅）を観光客に売っております。

五平餅というのをご存じないかも知れませんから説明します。

五平餅は、御飯に少し粘り気を付けるため粳米に少し餅米を混ぜて御飯を炊き、少し練って木を割って造った幅広の串の裏表に、江戸時代の金貨の大判小判の大きなものは大判形に、小さなものは小判形に練り付け、胡桃の実を擂鉢ですり、味噌と砂糖を加えて程よくすった胡桃味噌を満遍にぬり付け、炭火の縁に立ててこんがり焼いて食べるたいへん美味しいものです。

五平餅は昔から農家の人達が御馳走に時折作って食べるもので、炭を焼く家は炭火で、炭を焼かない家は囲炉裏の火の燠［おき］で焼いたものでした。

五平餅を食べる範囲は私の知る限りでいうと、長野県伊郡地方、同木曽地方、静岡県浜松市天竜区の水窪、佐久間などの北遠地方、愛知県奥三河地方、岐阜県恵郡、中津川などの東濃地方です。

普通農家が作って食べる五平餅は大判形の大きなもので、大人が一個食べると腹一杯なるようなもの、観光客に売っているものは小形の小さいものです。

さて昨年まで新野の道の駅で売っていた五平餅は、五幣餅という字を使った小形のもので大きな鉄板で造った火床で焼いたのを観光客に売り、客は立ち食いか何所かで腰を下ろして食べておりました。

家へ持って帰って食べるつもりか、包んでもらって車の中へ持ち込む者もありました。

今年五月連休のとき息子の車で行って見ると、五幣餅の食べ場を設け客が椅子に腰を掛け焼きながら食べられるように、机の上に炭火を起こした小さな火床を置き、その上へ金網を置き、客が注文すると店員が八、九［分］通り焼けた五幣餅を売り場から持って来て金網の上に置き、客が更に焼いて熱いとか美味しいとか言ってゆっくり食べられるようにしてあり、炭火の燠が少くなると店員が、20センチメートルぐらいの四角のボール箱に入っている炭を箱ごと持って来て、炭をくべておりました。

このボール箱詰の火は、店でも観光客に売っているようでした。

この炭を何所で焼いているのか聞いては見ませんが、この辺りは山地帯で何所かで焼いた炭を運んで来て、使ったり売ったりしているようでした。

私が毎年のように行って泊る向方の民宿旅館は、夕食のとき客に出す五平餅は大判形でガス火で焼く火床を使っているが、客が多く来て長時間五平餅を売る道の駅では、新野以外にも炭を使っている所があると思います。

（12）薪のこと

１）京都近辺

私の家には風呂がなく近くの風呂屋へ入りに行きますが、この風呂屋の燃料は薪です。

薪とはいっても販売用に造った束ねたものではなく、大工が家を建てたり修理するときに出来る木材の切り端や、家を壊わしたときあまり汚れていない廃材で、焚いてくれと軽トラックに積んで来て、置き場があれば其此に積んで置き、沢山積［ん］であって置き場が無ければ他所の風呂屋へ持って行きます。

近頃自家用風呂が増え入浴客が少いようですが、燃料費が只のようですから採算が合っているようです。

木を燃やした煙りは水蒸気のようなもので、空気をあまり汚しませんから良い燃料といえるでしょう。

京都市大原に住んで居るイギリス生れの中年輩婦人の家では、ストーブに薪を焚いているとつい最近テレビに映っておりました。

滋賀県大津市石山外畑という山間に住む私の親類の家では、建築用材の切り端や近くの山で伐って来た木を、風呂沸かしの焚木に使っております。

２）長野県

私が毎年のように行く長野県天龍村神原の向方という集落は、杉林に取り囲こまれたような、空屋もある爺さん婆さんの一人二人暮らしの家の多い過疎の集落ですが、風呂を山から伐って来た薪で沸かす家が何軒かあり、飯炊［ママ］プロパンガスを使うが、長い時間かけて物を煮たり茹たりするときは薪を使う家があるといいます。

（13）炭の原木の良い木と悪い木（南信濃の山）［書簡では、ここより「二部」となる］

最良木

かし、くぬぎ、みずなら、こなら、あべまき。

良い木

りょうぶ、とうねりこ、やしやぶし、みねり、みずめ、あかしで、くろぶな。

普通の木

かえで、いたやかえで、いっつき、（だんごなしという）、すなしのき、しで、さるすべり、みずき、けやき、かつらのき、しいのき。

やや悪い木

やまさくら、あおしで、ちしや（こはぜともいう）、みずぶさ（車みずという）、うりのき

悪い木

しらかんば、ぶなのき、さわくわ。

炭に適さない木

ほうのき、とちのき、きわだのき、えんじゅうのき、くりのき、どろのき、くろ［る］みのき、さわくろ［る］みのき、はんのき、おおばらのき、あぶらこしのき、はぜのき、やなぎのき。

しなの木は炭に焼いたことがありませんでした。天竜川端に生えていた椿、柊［ひいらぎ］は良い炭が焼けるが低木で数が少ないものでした。

榊［さかき］は炭に焼いたことがありません。京都近辺の山に常緑樹で榊によく似た「さいご」という木か沢山生えておりますが、この木は炭に焼くと普通の炭に焼けたとのことでした。

（14）山の木の考

杉檜は厚植えして下苅しても間伐しなければ下枝が枯れ、筆の先を上にして立てたようにひょろひょろ伸びになり、べた雪が沢山降ったときと大風が吹いたとき折れたり倒れたり倒れかけたりします。

倒れると根元の所に穴凹が出来、倒れかけた木は根が持ち上がって隙間が出来、大雨が降ったとき雨水が沁み込み、山崩れが起きやすくなります。

その訳は、松の木を含んで広葉樹各種入り交って隣に生えている木の太根が地表の少し下で網状に絡み合い、地層を守っている格好になっております。

杉檜は枝の張っている分だけしか根が張りませんから、隣の木との太根の絡み合いがありません。

檜は土の締った痩地に育つ木で痩地に植えられ、木の質が丈夫で大雪にも大風のときにも、折れたり倒れたりするようなこがあまりありませんが、杉は檜に比べ木の質が弱く、土の柔かい肥えた所に植え

ますので、根が張っていないと倒れたり倒れかけて傾いたりします。

次は広葉樹林を伐採するとどうなるかですが、樹齢七、八十年以下の木は一部切株が枯れ芽の出ないのもありますが、大部分の木は晩秋から冬にかけて伐った木の切株から、春沢山芽が出て生長を始め、春から夏にかけて伐った木は割合早く芽が沢山出て伸び始めます。十月頃に伐った木の切株から沢山芽が出かけます。

広葉樹林を伐採すると初めの一年ぐらいは草があまり生えませんが、二年目から草が沢山生えて草薮になり、三年目には更に沢山生え、谷間のよく肥えた所ほど草が沢山生繁ります。

また所によっては黄色い笹のなる棘［いばら］が生えてきて、棘と草の混合薮になる所もあります。切株から沢山出た芽は弱いのが次第に枯れ強い芽だけが木になって生長するものです。零種［実生という意味と思われる］から生えた芽も草に負け枯れるのもありますが、強いのは枯れず毎年少しづつ大きくなります。草の寿命は、一年棘は二年、木は永年で、伐採してから四、五年で木の枝を沢山地面一杯挿したような柴薮と変ります。

切株から生えた木も零種から生えた木も弱いのが枯れ次第に木の数が減り、十年経った頃にはまだ柴薮的で、十五年二十年と経つと林という感じになり、その後も弱い木が枯れだんだん木が薄くなり、かなり先まで地面が見えるようになります。

樹齢二百年か三百年か分りませんが、直径40センチ50センチ一メートル近くある大木を伐った切株から芽が出るのもありますが、これは枯れて生長しましません。大木林の中にも種から生え樹齢七、八十年以下の若木が少しは生えているもので、その若木の切株から出た芽は数が次第に減るが生長します。

よって大木林の伐採地は種から生えて木になる木が多いため、柴薮になるのも林になるのも若木の伐採地より多少遅くなる感じです。

また大木の切株は芽が出ず根も株も腐りますから、若木を伐った山の急斜地より、大木を伐った急斜面地の方が山崩れが起きやすくなります。

山の木を伐った後なかなか木が生えて来ず、雨が降る度毎に濁水が海へ流れ込み、海が汚れて魚が取れなくなったため、山へ木を植えたら谷川の水が美しくなり海の水も美しくなって魚が沢山取れるようになったと、テレビで放送されたことがありました。

作物を永年作り続けた田畑はなかなか木が生えて来ないものですが、その縁の草苅場だった所は早く木が生えて来るものです。

また樹齢六、七十年の杉檜林を伐採して放って置くと、下生えの広葉樹は少ないものですから何所からか種が飛んで来て木が生えるというもので、木の生えて来るのがうんと遅くなります。

長野県天龍村神原のある所の山では、樹齢六、七十年の杉檜林を十年ほど前に伐採しそのまま放置してありました。その山は高い所を林道が通っていて車で通って見ると長い間草薮でしたが、昨年5月通って見ると木が生えて来て小木の薮と変り、山菜の王様たらの芽の出るたらの木が所々に生えておりました。

(15) 竹は樹林へ生え広がり笹は針葉樹に負ける

筍を食用に親竹を籠編みに植えた淡竹、孟宗竹は、筍を取らず竹を伐らず放っておくと、杉檜の植林の中へ広葉樹林の中へ生え広がり木を傷めるというのでボランティアの人達が大勢集り来て、竹伐りをやっているのが時にはテレビに映り、電車や車で走って見ると里山にそういう所が見えます。

大きくなる竹は林の中へ生え広がって木の生長を妨げますが、同じ竹の類でも篠笹、根曲り笹、熊笹は針葉樹に負けます。

笹の生えた広葉樹林の中に一本二本と樅や檜の生えているその木の枝下には、笹は生えていません。

南信濃や愛知県奥三河の山地で大正時代や昭和の初め頃笹の生えた広葉樹林を伐採して杉檜を植えた山は、度々下苅りするから笹が弱って無くなったのか、杉檜樅などの針葉樹に負けるのかは分かりませんが、私が子供時代植林した山には笹が生えておりません。

（16）パルプ材雑感

製紙用パルプ材を伐ったのは昭和50年早々の頃までで、それ以後日本の洋紙は輸［入］材で造られるようになり、広葉樹を伐らなくなりました。

よって日本の広葉樹林は外材によって保護されている、と言っても過言ではないかも知れません。

（17）長野県天龍村付近の植林［2012年１月25日付の手紙］

次ぎに長野県最南部山村以南の天竜川水系と、奥三河地方の場合、明治三十年頃までは焼畑跡地に杉檜を植えて植林地が広がって行きました。

明治末年頃までに植えた木は、戦争のとき米軍機の爆撃によって焼野ヶ原となった都市部の、取り敢えずの復興材として、その後増改築材として大いに役立ち、材木の値が上がったことから植植熱［ママ］が盛り上がり、昭和三十年代に入って炭焼は大体終りとなったが、広葉樹の太く真直な木は箱材用に、曲った木や細い木は製糸［紙］用パルプ材に伐られ、その跡地へ杉檜を植えつづけました。

昭和五十年代半ばの頃から外材輸入で国産材は値下がりを始めたが、それでもまた上がると気持ちがあり、植林を続けました。

しかし、若者は町場へ出てしまい、村に残って木を植えた人は年寄って山へ行けないか亡くなるかして、間伐遅くれの山が目立つようになりました。

何時までも外材が無制限に輸入される訳ではありますまいから、国産材の需用が出てきて値が上がり、さぁ伐採しようとなったとき、伐採搬出の技術を持つ労働者不足に悩むことになるかも知れません。

４．おわりに

長らく長野と京都の山に関わり、そして薪、木炭を生産、販売されてきた中村氏の言葉は具体的で非常に説得的であったと思う。外材輸入に関することは一般にも膾炙されているかもしれないが、するどい観察眼による記述が随所にみられた。

たとえば、樹齢による萌芽力の違いに関すること、倒木と山崩れの関係について、土砂崩れに関する観察、針葉樹と広葉樹における根の生え方の違い、植生の遷移について、樹木と竹、笹との生存競争について、いずれの記述もその観察と洞察は自然科学者ばりの鋭さといえよう。

さらに、炭焼き窯の跡地は肥えており植林が行われたという点も興味深く、東北の山間地では、跡地に山菜が良く生えるという地元民の知恵（在来知）と共通するものがあるだろう。

また、明治時代における焼畑地への植林といった記述も、一般書物では比較的少ない指摘である。

社会・経済的な視点からいえば、「炭は使う者があるから焼く者がいるということです。」という言葉に、これまでの薪炭の移り変わりの原因を一言で表現しているといえる。1960年以前は、家庭用、産業用として日本のエネルギー源の一翼を担ってきたが、エネルギー革命により石油を中心とするエネルギー源に農山村までも転換していった。京都市中は農山村に比べて早くから薪炭以外のエネルギーを利用されていたとはいえ、中村氏の記述によって、昭和40年代というかなり遅い時代まで一部では利用されていたことが具体的にわかった。

炭に適する樹木について、『沈んだ村の物語』の著者である佐藤石太郎氏の評価と突き合わせた結果が表１である。佐藤氏は白石市の山間地で中村氏と同じく白炭を主として焼いていた。

表１　炭原木の適性評価

	中村氏	佐藤氏
ケヤキ	普通	上等
クリ	不適	最低（ただし鍛冶炭には最高）
イタヤカエデ	普通	上の部類
コナラ	最良木	上等（ただし老木は嫌われる）
ミズナラ	最良木	上等（ただし老木は嫌われる）
ハンノキ	不適	中位
クヌギ	最良木	最高
カツラ	普通	良くない（水分過多のため）
ホオノキ	不適	あまり良くない
サワクルミ	不適	最低
ミズキ	普通	中の下位
ブナ	悪い	大木は駄目（40年未満は適）
シデ	普通	雑木のなかでは最良
タラノキ	不適	駄目
トチ	不適	最低
山サクラ	やや悪い	あまり良くない

出所：佐藤石太郎「沈んだ村の物語」、1989、2－50ページおよび本文。
注：樹種の表記は佐藤氏による。

コナラ、ミズナラ、クヌギといった一般に適木といわれている樹種は両者とも、「最高」、「最良」や「上等」と高く評価している。また、ブナ、クリ、サワクルミ、タラノキ、トチは両者ともに「不適」、「最低」と炭の原木に適さないと評価している。炭生産にとって原材料である原木の見極めは非常に重要であるため、樹木に対する評価は両者において共通する部分が圧倒的に多くなっているのであろう。

しかしながら、シデ、カツラ、ケヤキなどは両者の評価が異なっている。東北と信越という地域性か、あるいは窯の相違が関係しているかもしれない。

中村氏本人は大変謙遜されておられますが、尋常小学校卒業後、実業補習学校の夜学二冬と、青年学校を終えたという非常に向学心をお持ちです。[6]鋭い観察眼と洞察力は現在もご健在のようであり、薪炭に関する現在のニュースへの記述も数多くみうけられました。中村氏のますますのご健勝をお祈りして筆を置くことにしたい。

付記：第１節、第２節、第４節を谷口が執筆した。第３節は中村氏の書簡によるが、谷口が全体を監修した。

謝辞：手稿の活字化では、竹内史織さんの協力をえた。感謝申し上げます。

1　薪炭いずれも「平成22年特用林産基礎資料」（特用林産物需給動態調査　＞確報　＞平成22年特用林産基礎資料　＞年次　＞2010年）、2011年12月28日公表、e-stat（政府統計の総合窓口）、http://www.e-stat.go.jp、

2012/02/23アクセス。

2　「長期経済統計」の推計では3,080,000トン、梅村又次 ほか『農林業（長期経済統計　第９巻)』東洋経済新報社、1966、248―249ページ、第48表「木炭、薪および林野副産物の生産量」。

3　生産量の数値は「長期経済統計」第9巻。換算率については、「丸太ヲ組合セテ棚積ヲ為ス時ハ、大体ノ平均上一棚ニ對スル實積歩合ハ、大約七割ト看做シテ可ナルカ如シ」（小出房吉・佐藤義夫「其二．薪炭材ノ層積ト實積トノ關係ニ就キテ」『東北帝國大學農科大學 演習林研究報告』第２、1915年11月、41―42ページ、http://hdl.handle.net/2115/20588、2012/02/23アクセス）を利用した。

4　2011（平成23）年より平成22年度に同時開催された「海・川の“聞き書き甲子園”」と統合され、「聞き書き甲子園」となっている。

5　2012年３月18日付書簡により修正。

6　中村一幸、『奥三河、南信州に生きた越前炭焼とその息子』、信毎書籍センター、1986、565ページ。